

第十二回備前市文学賞 隨筆【一般の部】入選作品

不自由を満喫する

岡山市 赤井祐介

朝、目覚めると、重たい瞼を必死に持ち上げながら、忍び足で寝室から抜け出す。白んできた空を横目に、淡い期待を抱いて朝食を用意する。

「今日は完食してくれるかな」

準備が終わると、囁くように寝息を立てる天使の寝顔をのんびり鑑賞する。そんな優しく流れる時間は、堰を切つて溢れる泣き声を合図に、不意に終わりを告げる。それまでの静寂をかき消さんばかりの慌ただしさが訪れる。それが私の日常である。

二回目の夏を迎える息子が、言葉を理解し始めた。身体の扱い方も上手になり、息子の遊びがダイナミックなものに進化していく。私も馬乗りになりながら嬉々として拍手する光景は、息子に弄ばれると表現する方が的確だろう。屋鳥の愛とは言い得て妙で、息子の腕白加減に手を焼きながらも、全てを愛おしく感じるのは親馬鹿だからだろうか。

息子が生まれて以降、親としてのふるまいについて自問自答しなかつた日はない。

「親とは何だろうか」

納得のいくまで考えを突き詰めるのが私の性分である。親という漢字は、子が親の位牌を仰ぎ見て偲ぶ様子から生まれたようだ。親の成り立ちが没後とはあまりに空しい。

「自らの未熟さを見せつけられ、立木のように立ち竦む様子が語源だ」

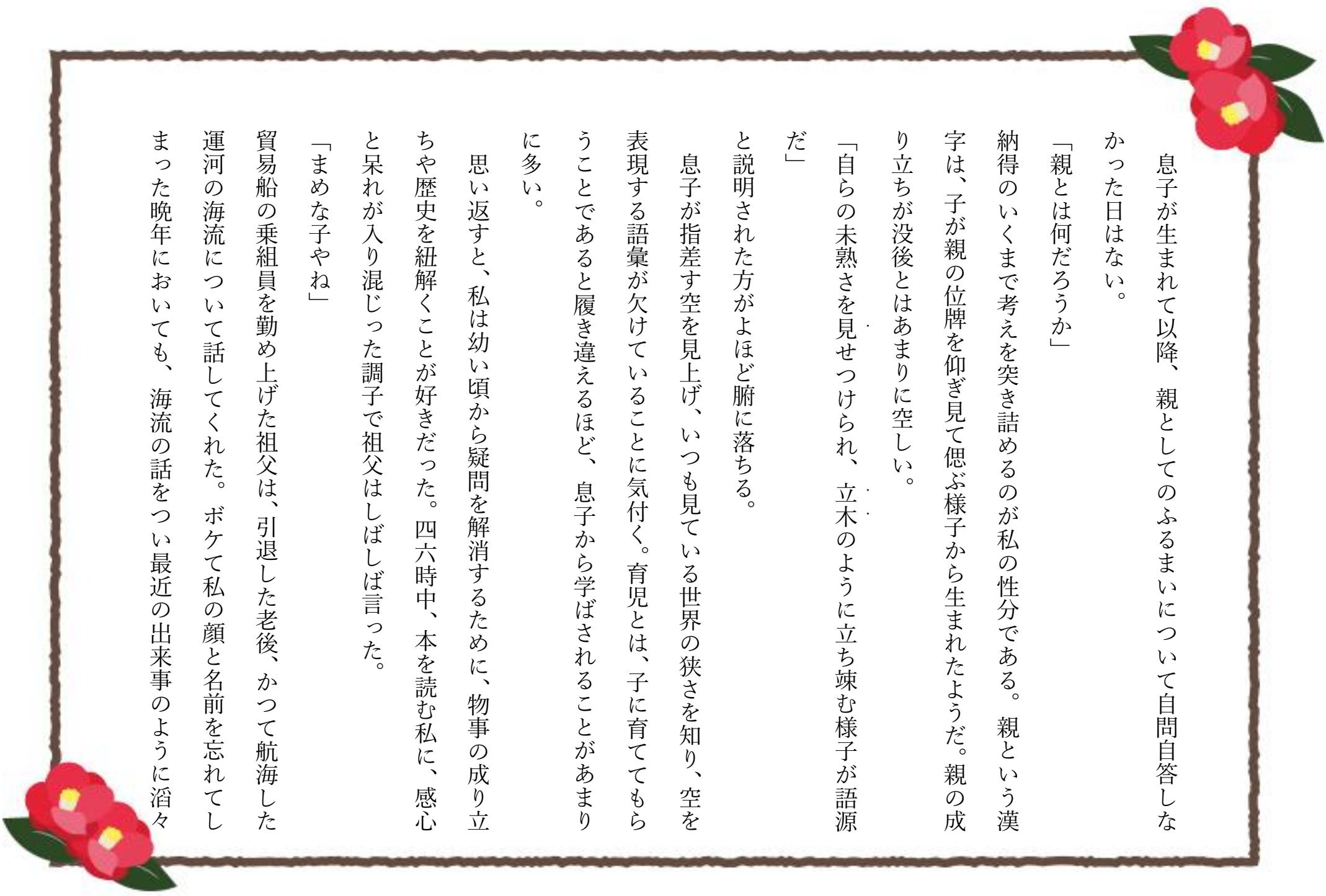
と説明された方がよほど腑に落ちる。

息子が指差す空を見上げ、いつも見ている世界の狭さを知り、空を表現する語彙が欠けていることに気付く。育児とは、子に育ててもらうことであると履き違えるほど、息子から学ばされることがあまりに多い。

思い返すと、私は幼い頃から疑問を解消するために、物事の成り立ちや歴史を紐解くことが好きだった。四六時中、本を読む私に、感心と呆れが入り混じった調子で祖父はしばしば言つた。

「まめな子やね」

貿易船の乗組員を勤め上げた祖父は、引退した老後、かつて航海した運河の海流について話してくれた。ボケて私の顔と名前を忘れてしまつた晩年においても、海流の話をつい最近の出来事のように滔々



と語った。世界を股にかけた経験が血肉になっていたのだろう。

石川県は能登。古くは天領として栄えたことを窺える立派な家屋が立ち並ぶ地区に祖父の家はあった。学生の時分は、長期休みの度に訪れ、家からほど近い海辺で日が暮れるまで遊び、食卓には拳大のサザエの壺焼きが山盛りで並んだ。

そんな日常生活が当たり前ではないことを知ったのは、石川県を離れて一人暮らしを始めてからだ。サザエが店頭に並ぶ食料品店は稀で、可愛らしいサイズのものが僅かに売られているのが闇の山だ。現金なもので、目を見張る値札を見て、サザエの身を取る鬱陶しさが、かけがえのない記憶へと姿を変えた。その祖父が五年前に他界した。享年九十歳だった。

祖父の葬儀以来、綺麗に仕舞われていたサザエの記憶は、二〇二四年一月一日、乱暴に掘り起こされた。能登半島を襲った地震は、多くの人の命と日常生活を奪い、私の心にも痛みを伴つた喪失感を植え付けた。アイデンティティが揺らぐほどの衝撃は、能登での原体験が私の血肉になっていたことを示唆していた。人並みの故郷愛など持ち合わせていないと思っていたが、どうやら違つたようだ。

日常生活が脆く崩れ去るきっかけは、災害だけではない。子供が犠牲になる痛ましいニュースを見る度に、無念と怒りで胸が締め付けられる。

「何気ない日常こそが……」

そんなことをつらつらと考える最中、思考のほとんどを息子が占めていることにふと気付く。

なるほど、親とは不自由な存在である。都合などお構いなしの奔放さに振り回されて、ありつたけの体力と時間を捧げる。離れている時でさえ、あらゆる可能性が不安を駆り立てて集中力を奪おうとする。余計なものが入る余地などない。数年前までの空虚な自由とは裏腹の、心地良い不自由が日常に充满している。最愛の存在がもたらす不自由こそが安らぎを与えてくることを、少し前の私は知らずにいた。

私は、繰り返されるありきたりな日常を、かつてのサザエのように噛み締めて、今日を存分に堪能するのである。

